



里見八犬傳
第九輯
卷四



13
5415
52



3416
50

九編六卷一角

口

松野

續善院

南總里見八犬傳第九輯卷之四

東都 曲亭主人編次

第九十八回

盗人の從者偷走りて盜小戮したる
賊巢の宿りて強人賊難を免る

却説高梨職徳の強人但鳥業因門を既小搦捕かき下れ小嘯囉三名も一緒に
數赤赤て夥兵小牽一衙所小還りて即便他們が出処來歴做き悪吏と責問赤業因
り頼陳して罪と免れんと欲されども這時も腹内の鼓耳あると聲已まき他が答へ
びて出処來歴年來の悪事と考えあけか赤業因竝に小嘯囉們の諍ひ難て陳き事
みこれと承らるるに膽吹山の躰住て相従ふ小嘯囉言くあり毎小良民を殘害し財
貨と奪略する又口腹を貪る與ふ婦の腹を裂きて胎内の赤子を某が七折り酒
菜小またる且の日の祇園會の山鉾を覗き思ひて三四個の支黨と從へ悄悄地

八犬傳九輯卷四

八犬傳九輯卷四

京師ふ来つれども本日尚書集の内面善れる者もわん然と聊遠慮を旋らり小經紀
見お打扮て市廛の簷下立在る折腹内ぞりの奇病暴お發り積悪忽
地發覺れて檻の獸さるるよと送る招つければ業因が腹内ぞ呵々笑ひ
是よりその聲絶おけり職徳を听果ての奇の驚驚なる然氣もせせ業因お
ち對ひ仇と疾視てやれ兇賊思ひ知るや那袴無保輔金山左衛門藤澤入道淺
生松孺昔よりして世に強人といふもの胎を奪ふその子と咬ひめを
穿る惨毒鬼畜お弥増る悪報竟お免れず腹内より聲を發してみづくその毒惡を
許るの眞四訓觀面汝が為お殺される幾人の死の魂魄汝が五臓おけ入るものせ
あらん地獄天堂遠くお輪回應報甚近る自業自得おあやとられて業因
法る色もろち仰せ冷笑ひて腹ぞのめられとも我一刀を腰おせ殺脱んと易り
まを救形貌を度て身寸鐵を帯さりければ和主の手柄おせられるとせも果は野兵

り四能立の早茶おふ索會縮て牽立支黨三名お共侶斯波細獄舎お敷おたり徳高梨
職徳の業因が罪惡と件の奇異の趣を官領河島山おわけて這賊膽吹の巢穴お支黨
居るいん討も勢とせ全功おかおん飲什麼仕るべうと上自同い票お三官領
隨便詮議の件の但鳥業因の都下へお名おえするの膽吹山討お六角家へ仰付
られて觀音寺の城より遣されん職徳今番お山賊の頭領を搦捕りおん柄を世お
強人の勘とれ胎を奪ひて其小兒を咬ひ前未聞のえかの大悪人の常刑をて去るべ
とて八割の極刑お行ふ支黨三名も俱は鼻首おと下知する是より職徳の衛所お
退り上旨を傳へ先業因を生さる八割を斬割とて後お誅りて小嚙囉三名も俱お賀
茂河原は鼻首をとり是を規るの堵の如く那怪談を話傳へ或は年來業因お腹を裂れ
胎を奪れる幾の婦人の怨火の所為るべとあお我を非とて那強人の腹内ぞの
ごつえの應聲虫蝮との病痾の所為るべと詳しと中お博おあり詞徐お諭せやう

かうせいのち 奇病の 病人の 腹内の 聲あり 又その 如くもの 則是 响の音 心
応聲虫との 奇病の 病人の 腹内の 聲あり 又その 如くもの 則是 响の音 心
奇小異なる 病人の 腹中の 聲あり 又その 如くもの 則是 响の音 心
去の 応聲虫の 腹を 是を 怨霊の 所為と するに 據あり 似れども 推量の外 殊出せ 口毒
悪の 真罰を 然る 奇病と 罪惡と 自許し 誅戮せしめ 又他が 小児を 咬ひ 然るに
奇談と 做す 足る 鳥許と 喚做す 國の 俗に 各々 初て 子を生 たるに 解て 咬ひ する
味ひ 美けれ 王の 献き 後漢書 外國傳 あり 我邦 性敢 なる 俗
者 鳥許の 白物と 喚做し 又鳥許 則那 老学庵 筆記 蜀人の 人物の 誇る 見えて 嗚呼 鄙む 則 噫嘻 鳥許 美
と 同ト 似て 非ざる 左まれ 右も 鳥許の 如く 已子 喫ふ 毎と 素
去の 又人の 子と 咬ひ 世に 大皇國の 神代より 武を 宗と ぬる 素
より 魚米の 富る 獸の 肉も 喫ふ 稀に 況人を 咬ひ 繪卷 載る 酒顛童子と

今番の 但鳥業因の 俗に 好て 人の 小児を 咬ふ 好て 已が 小児を 殺し 愚
夫愚婦 村落邊 鄙と 間引 團と 喚做し 約する 團の 愚民の 生る 子の 多かれ 養ひ
命を 間引と 俗の 解て 咬ひ 初子の 厭ふ 子の 多かれ 厭ふ 愚俗の 面を 間引 又口は 是を 何と 那業因の 小児を 咬ひ 眞罰を
腹の 聲あり 惡報を 免れ 是の 推し 人の 子を生 たるに 已が 子でも 間引 夫婦の
膝より 必人 面瘡と 生じ 聲高く 不慈 慘毒を 罵り 該する 然るに 怖る 徴なり 公然と 俗と 做す 間引 團を 悲し 又那 間引 團を 隣に 隨胎 團と 喚做す 男女 密會 有身 腹の せん 胎を 隨せり 又密夫 夫婦 或は 年々 有身 胎を 厭ふ 隨胎 團を 走る あり かの 愚夫 愚婦 胎を 腹に 列て 子の 咬ふ 異なり 夫 間隙を 鑽り 法度 犯して 男女 密會 有身 免れ 罪過

する。その腹に存子と害まじ不仁是より甚しうなり。されば那夫婦の如し。諸胎の祟ありて
 とも。神も佛も然る不仁者といふ。守りあへん慈悲ある人の他とて。悪鬼羅刹と云ふは
 既に神も守り。又佛も憐れま。身後の悪報。子孫の魂を落免る路あり。世に身
 後の業果と恐れ。子孫の栄を願ふ。の焦眞の虫なりとも。故てあれを殺さ。その身の與
 の壽命と欲り。子孫の栄枯を念ひ。勉て陰徳と約す。子孫十世及ぶまで。血肉を
 相續ぐ家。先祖陰徳あり。又何ぞ疑ん。然る善悪の心報。遅延あり。早死あり。今
 番業因が奇病の悪報と傳て。那間引。困墮胎國不知。幸ひ。迷津の二代も
 是將美善の捷徑あり。やと解せば。件の人々感服して。心裡恥し。思ひけり。問話休
 題の時。近江の膽吹山。但鳥。踏六業因が山寨。妻の嚮身。故りて。但鳥源金太素藤
 と喚ぶ。一個の男兒あり。性悪。力量武藝。親小劣ら。魯英雄也。今茲二十歳。且奸
 智も長し。いぬ。日業因が京師へ赴くと。去る途。くつ。を諫め。か。聴れ。甲斐なる

このよ。そのり。た。こぬまひ。や。折々分散して。隣國他郷。故。非
 是。餘の業因。下の小。嘯囉。百五十名。ある。その折々分散して。隣國他郷。故。非
 廻り。暴拵。を。と。ま。れ。目。今。山。寨。在。る。處。二。百。名。過。ぎ。り。然。り。又。い。ぬ。日。頭。領。業
 因。從。ひ。て。俱。京。師。へ。赴。は。る。那。小。嘯。囉。四。名。の。内。中。獨。緝。捕。免。れ。率。八。と。喚。做。ま。り。の
 也。渾。名。馬。面。郎。と。り。る。を。面。框。最。長。く。板。齒。斜。め。反。れ。名。ま。八。と。り。る。率。八。と。友
 齒。と。音。訓。似。し。却。這。馬。面。卒。八。と。業。因。が。獨。子。源。金。太。素。藤。の。得。意。也。折。々。陪。堂。小
 せ。れ。か。逃。て。膽。吹。山。へ。還。り。折。先。素。藤。が。便。室。あ。り。て。其。生。逆。旅。の。凶。變。業。因。の。京
 師。也。祇。園。神。會。を。親。る。折。腹。内。の。聲。あり。て。悠。々。と。暗。り。室。町。家。の。市。正。高。利。水。職。徳。小
 空。知。り。て。矢。場。の。擲。捕。れ。り。と。詞。意。逼。く。解。示。せ。る。素。藤。色。を。失。ひ。て。あ。ら。う。ん。遠。か
 ら。這。里。も。緝。捕。の。大。勢。と。向。れ。ん。疑。ひ。る。ち。折。齊。一。カ。と。勅。して。一旦。防。戦。ふ。も。二。百
 許。の。小。勢。あり。て。克。と。取。る。と。か。ら。う。二。千。六。計。走。る。と。う。と。是。快。這。山。と。立。去。り。て。又。せ。ん。術。の。あ。ら
 ん。か。そ。思。ふ。も。皆。悉。山。寨。と。番。あ。り。て。出。る。と。う。必。追。隊。へ。趕。逼。ら。れ。て。免。れ。ら。る。る。あ。ら。う。

縦追隊不遇とも脱れ去りしと知らるる久後背安らば佳れ京師の凶喪を伏家の都て
 秘して箇様々々ふひ誘え我身の獨和郎と將て多他御へ走るべし謀めて人々疑れそ
 よくせか。と期と推せ卒八听々含笑てそを妙策をるる然る左の右をあへと心を
 屢屬けつ屬らる。逆旅の準備遠くは素藤の親の有財と悄中合會出て見る小一千五六
 百金あるそ内中十裏千両を勤吐は藏め腰の纏ひと餘る五六百兩の行擔は造りて卒
 八が肩小拭きせんとい準備を多も敷きけれは素藤の然氣を伏家の老賊礪時願八平由
 張盆作ると喚做する西二名と招ききて告る。和主のいふ事知りませ。京より大人の消
 息と察して卒八分かの來り子親の思ひ今おとめぬと告る。大人の所要は別美の
 あら我も京師來るとをの支の趣は祇園神會の二三度観られ今茲の特小與る河
 原の納涼の爲愛され非除神會の日後とも卒八を將て我歌店來。狐疑と親の
 等なるといひかたぬひら佳れ今より立去り路次といそで京師に到り姑且留守と憑ひ

のまのりて大家異議をいふ。とそを差したるる亭午の酷暑不堪とからん今より出
 ても夜行を縮む。幾日もあて京に到り留守に我ありぬ。いそせぬと共侶の諾いて
 馳て目送りける。小程素藤の凶と避て吉趨る。等策とる。と思へ投て往方と定めぬ
 ども先美濃路へとて赴程。卒八は後先中も立て慰め。のこ瀧心く俣しける。抑近
 江の膽吹山の坂田郡に在り山より東の美濃洲の山東北州界より千足まで十八町ありとそ
 れども官道にあらず。素藤が膽吹山寨と遠く立去り未牌の時候より山路の日
 影の没易くてもと才の三里許下晡よりけり。登時卒八は後方より素藤を喚掛て
 やよ喃小頭領這頭い下下の寒村を好飯店とゆるかかん。小可先走抜けて好宿徴そ
 又其首より出迎へなむ。是より路の髪直あて迷ふべし。迹より徐來ぬ。いねとの小
 素藤領てそよく心づかぬ。快くぬ。いねとの小卒八は阿唯々と心あつ。ゆへ先
 たちて東を投て走のけり。既にして素藤の今宵の歌宿を卒八儘しければ路を三尋



八尺傳七屏巻四

七

大坂屋敷



八尺傳七屏巻四

大坂屋敷

蒐らんとせし程の卒八と吐嗟とどろり駭怕れ玉盤を踏碎に蹴散らして慌て庭より逃走
 して堀を乗り越り外面へ控と下りて又走ると素藤の逃さ下りて續いて堀のみを掛り閃りと
 うち踏を修煉の剽捷何果をもと趕蒐る迹の土妓と艶曲妓們が駭諜して人を喚ぶ聲
 の遠く響えけり。命涯の逃れも折る千日の月刺昇りて躲る便りもなき
 去るは是非も御影寺のり走る小前向一條の川ありける。是則株川の渉さんと素藤の淺瀬を
 知るを背後より素藤が趕至し甚急めり。間近く走り引返して挑戦んと欲し不
 意に一條の棒も持たず腰の護身の刃ももつれが進退あふ谷りて己とを伴の川へ跳入
 りとせし程も素藤快く走來て大喝一聲、穀の閃を刀の光に今世の別路卒八と右肩
 尖より斜に左の腕をむきむきと両段の斬りて外れり既中素藤の四下と見え
 るの端を定め先血刀を拭ひ收め然而卒八の屍骸を探る小那六百兩の金の糸、徒紺の
 布の勒肚の收めて腹を纏着ておの餘此の日用錢も他が懐まれば皆米心も復

去て更の又思ふやう。這奴の我伴當も金の亦是我東西るれども只逃さ下りと思ひ憐れま
 生拘るべしと忘れり。結果て我憎恨を洩せり。又故の客店へかゝるる及て人疑れてい
 解くとも甲斐あるはべ。幸いして金の皆這奴が身附りける。迹未達せし行裏の棄り
 とも惜む不足らぬ。我も世間廣う身もなす。毛と吹て疵を求るとせん。夜は深るともこの
 川を渡して別宿へ来る。多くとありと。肚の同い肚の答る身の往方思ひ決り卒八の屍骸を
 川へ蹴落し。然而船を喚び渡を求めて御影寺の驛へ赴けり。小夏の夜は短くて。おのれ
 時刻ある。客店の門を敲けども宿借きくもあらず。おのれを誘へ房錢もなき
 合ふ。その天を才明けり。是よりして素藤の千五百兩の金と潜中の一箇分ちの半
 分の腰に附け。半分は肩から掛て岐路路。東へ赴く。素藤も急な旅をなす。筑摩の温泉の
 卒八も夏を過し。八月の時候鎌倉杖と曳て世渡る便具を求むべし。倘然所富あらずと。急
 急路費と旅の皆喪ひ。又昔の山家あるとの。何の里の日の照らざる。急ぐ要急

り多きと獨占る無敵の料簡岐嶼の旅店日敷麻子温泉に來りければ其甲と
 嘔做ま客店の坐席を借りて逗留する日毎に浴湯を浴びる然れども此地も山里に推津の
 有馬伊豆の熱海に似るべしとあつたれば那這も旅客聚合して夏の湯治を旨とせられ
 思ひよも徒然なる詞敵も稍出来て尉するが是より素藤は五六十日筑麻子
 在り三伏の暑氣早晩冷て稍肌膚寒くする随分同宿の旅客の漸々立去り四下寂
 々する一ひ素藤も然るごとく筑麻子の歌店と立出り上毛より武藏へ新樵を録倉と
 規を思へ歩も找せども又只一日の既りて武藏の熊谷と鶴巢の間と豫備す曠
 野を獨過る折々曠野昏るるのけり浩処の兩個の自奉雄鹿榜の灰衣と裳短衣被下り
 物作りの山刀と瑠降の腰の跨へ身長より高き草葺の中より突然と頭を出て去向の路の
 立寒き素藤と乞と疾視てをれ行人命惜る盤纏も衣も遞与しての備又感て不字
 いの真草行の差別る刃のされ筆のいせむ覺期とせむと權一の訛聲頭刀晃りと引抜

たる登時素藤言も謀を切解く立と投指て立對り冷笑ひ噫嘻たり似而非剪
 徑們が獨行と侮りて虎の鬚掖く鼠の輩頭顱と棄てぬる飲らるるも果も兩個の強人
 眼と瞪り聲苛立て命知るの假猛者息絶る折後悔ま本意を母んと左右より數名
 刃の引外して抜合する刃の電光二人を敵も小控を去り踏入々々術と盡然しも修煉の
 刃尖の當難する兩個の強人東と投て逃走ると素藤逃ま趕趕鬼ててこのも幾許の花
 さく路の秋草の中搦る鉤索も忽地脚を騰れて憶を撲地と滾び去る左右も芒花の
 陰も兩個の強人走り出て起んと春蝨く素藤がもと枉け足と推縮めく十重井文字小結紐の
 けり當下逃る兩個の賊も走のかるるも這奴聊本事業の賣賣骨を折せかとも生
 拘りたれば殺ま易らるるのこのひも刀を抗て破んとせしと伏家の兩賊推林禁めてや寺這重
 きて屠りて骨を折る功をえ這行裏の重けの獲の必ヨラるべし這伏宿所へおて還
 ても頭領達小箇様々と報る拵栄あらん余ると野放しよまるるといふ逃る強人們の

共侶不點頭て然ら活と扛りて白ん足を拾け由断と啖ひ着れる。吾目あり四人持
 ても好荷とあるる白散動あて宙吊と野を西(我町ともくおてあたり)介程素藤の
 賊の圈套不無せられて既小擒ふ。争ふとも益事と思ひ絶つ。のりて死活(他)は
 儘(肚裏)思ふ。我(是)世(知)れる山賊の獨子也。今這奴(們)が暴拵(我)亦失
 る不慣覚(業)多(衣)編の拵(了)廢(了)る。半(年)多(た)と這(勇)徑(們)が(死)死(ぬ)る
 め得失(自)他(の)差別(あれ)も現(川)幸(川)山(幸)山(幸)山(幸)終(る)と(又)鄙(語)も今(我)上(り)と(覺)期(の)述
 懐(へ)品(出)集(る)就(鳥)野(棲)虎(勢)以(竭)て(倒)死(と)等(の)外(さ)り(け)却(説)件(の)強(人
 們)素(藤)と(お)て(ゆ)約(莫)半(里)餘(あり)樹(柵)間(を)番(山)の中(に)最(荒)る(廢)寺(の)門(内)に
 扛(入)れて(統)小(残)る(所)化(寮)と(な)り(た)縁(頼)の(下)卸(居)て(奥)知(甘)暗(踊)る(一)個(の)賊(が)紐
 附(て)衣(領)不(掛)る(叫)子(瀝)々(と)吹(鳴)る(奥)より(出)來(る)兩(個)の(頭)頼(燭)を(兼)り(刀)を(引)提
 げ(半)朽(る)縁(頼)不(雙)立(ち)左(見)右(見)て(若)們(今)宵(早)多(る)獲(ある)後(甚)麻(を)と(向)へ

みらくひさつ。頭領達(所)の亦(例)の曠(野)我(們)四(名)細(と)張(て)上(り)鳥(が)寺(一)黃(昏
 時(候)這(旅)客(が)只(一)個(裏)と(肩)不(と)來(れ)我(們)前(後)立(た)り(て)先(二)人(と)素(引)見(る)不
 思(ふ)倍(る)本(事)あり(克)と(取)る(と)易(く)引(外)逃(走)り(て)趕(し)と(例)の(釣)索(不)掛(滾)々
 生(拘)る(行)裏(の)最(重)に(不)肚(纏)ひ(路)費(あり)四(人)が(骨)を(折)て(生)拘(れ)る(野
 熟(せ)た)細(掛)の(衣)不(て)來(れ)る(日)獲(さ)る(新)刀(を)銚(を)と(る)人(骨)逞(く)肉(豆
 かり)見(ぬ)と(皆)誇(白)報(れ)兩(個)の(頭)領(ら)ち(合)笑(り)點(頭)て(そ)然(る)骨(の)折(れ)ん
 現(好)肥(る)大(漢)を(銚)刀(を)究(竟)い(て)共(侶)不(近)立(たり)て(燭)を(抗)て(は)ぐと
 うち(ち)俱(小)敬(馬)と(和)君(の)膽(吹)の(小)頭(領)源(金)太(主)る(者)と(同)て(評)る(素)藤(と)遠
 あく(仰)見(て)介(の)主(們)の(礪)時(願)八(平)田(張)盆(作)を(い)ぞ(思)ひ(け)た
 今(宵)の(再)會(句)我(と)救(へ)と(叫)ぶ(を)願(八)と(盆)作(の)素(藤)不(掛)る(索)と(遠)小(解)毒(を)て
 且(縁)頼(不)請(登)ま(れ)敬(馬)に(呆)る(下)の(強)人(頭)を(搔)け(跪)坐(る)敬(マ)と(え)る(願)八

盆作呵々とうち笑ひて若們の近江比這地で我の屬を認め成りも理の這方さる豫
 より噂をある近江の頭領でござるぞと論其四個の強人の俱に地上額をうて小可們
 眼あるを比敵も膽吹も知ると酷くを礼を仕ぬれさせぬとち陪話る素藤禁
 め尉めて命ゆて其身の造化を心竊おぼの送恨あるべもあられ強人毎に奪略する
 行裏と菅笠を主返して去きせ願ハヤヤと喚禁めて若們の柴折焼く快酒不血の准
 備せよ卒小頭領這方へと先立の盆作と俱の奥を伴ひける徳而願八盆作の素藤を
 奥有りたる坐席の上坐お請ひ茶と看めて送別後の苦樂を告る願八們が先合和
 君も豫兼知るべに往る六月某の日和君の獨卒八をねて京師へ赴けぬその次の日の
 ろの死室町將軍家の御説とて觀音寺の城より向られる緝捕の士卒千五六百名何の
 程より室町をけん山寒を臥糸く捕圍して猛可お稠入りり伏家の人々駭慌て一柱も防
 ぬるに峯上と踏て美濃路のく脱れ去んとせ程不遅ら谷へ趕落されて樹の根品稜お

身と碎し或の敷れ捕捕らるる落亡する稀る登時我兩名の析渡旋風二郎井栗
 奇九郎們と共侶の稍一方を殺披給て死するもなれり久這那に立潛むて七月の中流に這
 地不來つ這荒廢院を見出て隱宅おせま思ひ先を先を這寺の住小賊五六名
 あり初の拒を容れがりと武井執二の町るもと音我小戰ひ肩て住処を譲り下す
 屬て俱お掙んと陪話るが意不儘して候ので夜掙お出まふら今宵和君をねて
 來身四人も則先佳の伏家おゆに於他們が外二人ありを旋風二郎と奇九郎が俱して夜
 掙お出され曉天をく還るる大頭領の京師を腹のめ奇病ふも年來の好
 牙發覺れて市正高梨氏お捕捕らるるひも三個の伴當共侶の首級を河原へ梟られ
 たる那果の沙汰の世の風聲お正しく傳ふらと和君の上いも知る何れも昨日を
 隱宅もま旅より旅不這頭を徘徊おするも同の素藤然氣もなせば故意をかく
 嗟嘆と我も亦親のり又膽吹の住処へ緝捕の向ふら風聲を多く大津を吹く駭

伯れて京師へも、おぼしめ 終踵と旋りて、美濃へ赴け、信濃へ伶仃に丸磨の温泉店へ逗留
 して、憶念も目も累る程、平八は我行裏に撥擲して逐電あるも、おぼしめ 盤纏は此より
 懐かせもあれ、いづれ鎌倉赴きて世渡るよ、と求め思ひければ、此地まで来て和主們の
 環會ひ、舊縁盡き、禍の及て福ひおられる人、おぼしめ 諄反し、自祝して実説虚談、おぼしめ 不
 臨る、不信して誘ま、願ひも盆作も、定不然之と答け、姑且と素藤へ又願ひ、おぼしめ 對
 して和主們の思ひ、都て山豪へ別世界へ、上仕君の、又機と包る同僚もある、おぼしめ
 人の東西と我東西、おぼしめ 富王候も、一日露頭及び、細首と別れ、悪名とせ、おぼしめ
 送きの、唐山と山賊の天子、おぼしめ 後、おぼしめ 我邦と伊豫の純友京師の保輔、おぼしめ 豊
 後の金山誰、おぼしめ 一國と穀、おぼしめ 從て子孫、おぼしめ 後、おぼしめ 是、おぼしめ 亦方、おぼしめ
 國を盗みて、おぼしめ 困主とられ、おぼしめ 城を穴糶、おぼしめ 城主、おぼしめ 盗賊の各、おぼしめ 肩、おぼしめ
 栄と子孫、おぼしめ 今戦國の世、おぼしめ 生れて、おぼしめ 智計、おぼしめ 武藝、おぼしめ あり、おぼしめ 山、おぼしめ 朽、おぼしめ 果、おぼしめ 最

惜る、おぼしめ 我稍思ひ起せ、おぼしめ 今番鎌倉赴くも、おぼしめ 然計較の、おぼしめ 時運、おぼしめ 稱、おぼしめ
 福ひあり、おぼしめ 我一城の主、おぼしめ 和主們を、おぼしめ 折我身、おぼしめ 隨て、おぼしめ 真の武士、おぼしめ あり、おぼしめ
 這荒廢院、おぼしめ 優、おぼしめ といふ、おぼしめ 説、おぼしめ 願ひも、おぼしめ 盆作も、おぼしめ 所々、おぼしめ 似、おぼしめ 和君、おぼしめ
 馮了、おぼしめ 前、おぼしめ 徑と、おぼしめ 極、おぼしめ 易、おぼしめ 困を、おぼしめ 奪、おぼしめ 城と、おぼしめ 食、おぼしめ 及、おぼしめ 似、おぼしめ 和君、おぼしめ
 口の半分、おぼしめ 造化の、おぼしめ 目も、おぼしめ 我、おぼしめ 必、おぼしめ 隨身、おぼしめ 見、おぼしめ 空、おぼしめ 約束、おぼしめ する、おぼしめ といふ、おぼしめ 咄、おぼしめ 笑、おぼしめ
 折る、おぼしめ 下の、おぼしめ 強人、おぼしめ 酒、おぼしめ の、おぼしめ 湯、おぼしめ の、おぼしめ 舖、おぼしめ 添、おぼしめ して、おぼしめ 素藤、おぼしめ 薦、おぼしめ ぬ、おぼしめ 是、おぼしめ 主、おぼしめ 客、おぼしめ 盆、おぼしめ 遣
 替へ、おぼしめ 又、おぼしめ 巡り、おぼしめ 七、おぼしめ 醉、おぼしめ 盡、おぼしめ 七、おぼしめ 晤、おぼしめ 譚、おぼしめ 程、おぼしめ 夜、おぼしめ 長、おぼしめ 秋、おぼしめ の、おぼしめ 時、おぼしめ 候、おぼしめ 子、おぼしめ の、おぼしめ 中、おぼしめ 刻、おぼしめ 小、おぼしめ 一、おぼしめ
 素藤、おぼしめ 路、おぼしめ の、おぼしめ 疲、おぼしめ 告、おぼしめ 告、おぼしめ 不、おぼしめ 辞、おぼしめ け、おぼしめ 因、おぼしめ 願、おぼしめ 八、おぼしめ 盆、おぼしめ 作、おぼしめ の、おぼしめ 下、おぼしめ の、おぼしめ 強、おぼしめ 人、おぼしめ 小、おぼしめ 室、おぼしめ 素
 藤、おぼしめ の、おぼしめ 臥、おぼしめ 簾、おぼしめ の、おぼしめ 儲、おぼしめ け、おぼしめ 案、おぼしめ 内、おぼしめ 立、おぼしめ 七、おぼしめ 明、おぼしめ 日、おぼしめ 契、おぼしめ して、おぼしめ 終、おぼしめ 小、おぼしめ 坐、おぼしめ 席、おぼしめ 在、おぼしめ 七、おぼしめ 睡、おぼしめ 件、おぼしめ の、おぼしめ 四、おぼしめ 個、おぼしめ
 下の、おぼしめ 酒、おぼしめ と、おぼしめ 喫、おぼしめ ち、おぼしめ 勞、おぼしめ して、おぼしめ 旋、おぼしめ 風、おぼしめ 二、おぼしめ 郎、おぼしめ と、おぼしめ 奇、おぼしめ 九、おぼしめ 郎、おぼしめ 們、おぼしめ 還、おぼしめ ち、おぼしめ 徐、おぼしめ 坐、おぼしめ ち、おぼしめ 小、おぼしめ 程、おぼしめ 素、おぼしめ 藤、おぼしめ 醉、おぼしめ
 臥、おぼしめ 房、おぼしめ 入、おぼしめ ち、おぼしめ 毫、おぼしめ 心、おぼしめ 由、おぼしめ 由、おぼしめ 行、おぼしめ 裏、おぼしめ ち、おぼしめ 右、おぼしめ 左、おぼしめ 引、おぼしめ 着、おぼしめ 七、おぼしめ 陽、おぼしめ 光、おぼしめ 孰、おぼしめ 睡、おぼしめ せ、おぼしめ 如、おぼしめ

折々軒の聲と響く内外の動靜と現ひける。候り一程不夜の既、丑三つと思ふ時候、外面人の足响とて折戸を叩き立てる。是則別人の願、八金作們が伏家の強人、那井栗苛九郎と折渡旋風二郎が兩個の小嘘囉と従へ。夜拵了果て還れる登時、内より下れ賊一名、遠く縁頼不立出迎へ紙燭を抗てきて還らせぬ。是れ造化の甚麼ぞと問ひ、折九郎旋風二郎も共侶の舌打鳴りて、今宵の甚不獵也立上る腹も宿所來て横少の比東西欲一酒の酒飲と向くも、今宵俱不草鞋と解棄てうち登る縁頼の片隅の管登あやううとて、那の什麼誰が笠を這隠毛の相応、かぬ逗留客でもあつた飲と問れ、件の下下の賊の真指さ聲と低めて然之客も酒の酒の故の箇様々と那素藤の吉の趣盤纏、まの傍のまの空骨折る本意、まの崖略と耳に報れ、折九郎と旋風二郎の眉と頻りて、領くまの依奥へ赴け、願八と盆作の席と譲り、芳を賓客、酒の湯め、然而不盡と薦め、今宵料を素藤と再會の吉の趣箇様々と其示せ

折九郎沈吟と和主門の源金太の口車に乗せられて、皆実事と思ふ知ねと酒家の一切あるゆゑ、故と甚と推もえ、這夏膽吹の頭領が祇園會と親小京、ゆゑの折九郎の賢達と諫め、頭領の聴ぎて、就て京師へ赴け、祇園神會がなり、此を諫林の子と喚ぶとされ、といひも算帳合を招くと慌しく出て、前不都合、必是搗鬼也、那卒八がかり、折那奴、京師の凶変と、伏家知せ、源金太の報するん、あつて、那後生の親の有財と利、其與の伴の变と伏家の秘と有涯、その金銭を攫ひて、術よく誘へて、卒八を従へ、山寨を没落せ、然る今、那後生が盤纏をば、該はる、といひ、又旋風二郎の割膝と拵聲と低めて、井栗哥々の意見の妙、那後生の奸智、長と、折有財と伏家へ配分せ、人與不知り、支黨一百名、毒殺し、かゝる思ふ、折子、緝捕使の大將、小己が生死存亡と知せ、どての伎倆、あつた、然る凶と避て、吉不趨る、進退と知り、伏家の安危と、獨命と免れ、與ふ



八代傳九郎卷四

十四

文楽堂藏



八代傳九郎卷四

文楽堂藏

支黨一百餘名を賣る。那奴が計較憎む。信々恨まある奴を生拘て饒せのまら飽
 ま酒と喫へして然るる管款まらと敦圍暴く怨まれ。昔九郎も齒と切りて今中論
 議(益益)武藝(長)替力ありとも酔臥(れ)殺(易)易(ろ)盤纏(奪)腹(毆)醫
 さん皆(立)まとい(せ)願(八)と盆作(傍)痛(け)左(右)より推林(示)め。咳(お)らわ(ら)紛(ら)しく小
 室(指)示(して)共(保)頭(と)掉(り)諫(る)や。和(主)們(が)あ(ら)ぬ(も)の(理)る(は)あ(ら)ぬ(も)そ(る)
 推量(あ)て(證據)を(一旦)夏(の)錯(誤)あ(て)替(舊)好(の)人(を)殺(す)後(悔)ま(も)及(ん)や。且(而)二(日)
 這(里)留(めて)胸(を)撈(り)漆(下)板(目)れ(ん)然(而)那(折)の(處)と(実)を(知)る(よ)あ(て)和(主)們(が)目(今)
 論(す)如(く)る(が)俱(あ)る(段)を(旋)り(て)結(果)る(も)遲(は)あ(ら)ぬ(且)我(們)の(儘)一(ね)と(只)管(禁)め(り)
 已(ら)け(れ)昔(九)郎(も)旋(風)三(郎)も(と)争(ん)い(ま)ま(を)腹(平)作(の)茶(碗)酒(を)酌(し)壺(或)傾
 けて(喫)む(と)數(碗)及(び)ぐ(ら)睡(深)く(酔)臥(し)と(喚)ぶ(と)松(崎)九(郎)重(天)窓(の)旋(風)一(さ)又
 起(ぐ)も(あ)ら(れ)願(八)と(盆)作(の)術(生)醉(と)奈(未)餘(民)の(腕)小(極)よ(と)木(枕)と(這)那(兩)個(は)頭(の)

下(刺)入(れ)卒(と)次(の)房(退)り(て)睡(り)不(就)な(け)り。然(る)に(這)坐(席)より(素)藤(が)臥(房)を(小)
 室(遠)く(取)来(藤)始(り)も(真)毛(も)睡(ら)ぬ(け)れ(件)の(昔)九(と)旋(風)三(郎)が(議)論(の)趣(の)餘(の)
 多(ま)で(大)形(の)听(令)も(且)驚(且)怕(れ)る(肚)裏(不)思(わ)る(我)身(膽)吹(せ)脱(き)去(た)れ(候)
 那(折)の(計)較(を)那(昔)九(郎)と(旋)風(三)郎(が)猜(し)ぬ(れ)然(雖)言(の)思(ひ)と(做)ま(ら)然(も)あ(ら)ん(幸)
 ひ(不)願(八)と(盆)作(が)諫(禁)め(て)既(不)過(す)其(留)害(を)免(れ)ぬ(る)も(一)要(毒)時(の)程(を)
 明日(倘)一(致)せ(れ)る(主)客(の)勢(は)同(か)ら(む)四(個)の(敵)多(く)單(身)あ(ら)防(ん)ず(の)難(く)係
 べ(一)听(詮)天(の)明(る)も(情)々(地)不(這)里(と)立(ま)り(て)遠(く)他(御)不(走)る(小)あ(ら)思(へ
 ども)做(ま)す(も)我(身)の(依)逐(電)甘(那)密(譚)不(听)怕(し)と(多)も(影)と(艱)せ(し)と(亦)
 那(奴)們(不)笑(れ)ん(要)を(それ)と(人)根(性)潛(中)不(起)出(て)身(装)し(て)行(東)と(斜)背(へ)投
 拭(て)曾(て)楚(と)引(結)ひ(情)と(一)刀(を)腰(不)帶(て)偷(歩)し(て)近(着)て(坐)席(の)動(靜)を(観)ふ(不)
 願(八)と(盆)作(の)臥(房)入(り)て(睡)り(不)け(ん)只(昔)九(郎)と(旋)風(三)郎(の)衣(も)被(が)醉(臥)して(甲)

已が自由とゆれ照日隈多市中を那奴我を何とせんやと心あわめて經紀児の廓
 立ち飯と永酒三喫て惣程三日の高く昇りか願八門へ赴ても来日足ら亦
 復路次とて次の日武藏多柴濱まで来り折を黄昏多りか其頭の飯店
 宿と投てその夜鎌倉の光景を向ふ店小二が客を呼り近曾の山内の管領様も相摸の
 北條家と戦絶つ那那の神社佛閣も羊々哀微と今昔の鎌倉も且藤澤
 中も腰越の中も新溪を建て他御も来り遊歴人を容れざるは信れ客入鎌
 倉へ赴死めども自由とゆれ況世渡りの便着るもあはれ世渡りの便着るも
 遊歴せまき欲りある安房上総小優き地方も近屬安房の里見殿神餘
 與義兵起して山下定包と討滅し玉より以来安西麻呂の兩敵も朝日霜霜の消は
 似く幾程もく亡びたり然り上總の城主連も威風靡好通と那々小屬もと宗の
 兵只の武略の多る民を憐て租税と重く甘賢と愛と世傑を徴めあはれとせ

たり義實主いぬ比能田隱居す仲る今嫡子安房守義成朝臣のせられども亦
 是稀る賢君と廣く仁政と布給ふより上總のゆえ下總まで半分のゆえ入る
 ちある客人然ても鎌倉へんとあはれ藤原もまま尚安房上總へ赴給ふ這浦より上
 總も象良津(出船日毎あはれ)翌早開附船を無走りぬる一果と坐して下
 船の茂に誰何と直実達てゆりその理あはれ素藤の沈吟する頭を拾ひ小舟對ひて
 いづ趣あるゆえ鎌倉と由縁なる名高都會の福地を世渡の所由あると思
 ひ空瀬を鈍望と夜交する楫を合直と上總へもくべれ明日の船と湯む
 のとつ小舟再議不及ゆえ果て退り信而素藤の詰朝料の出船する
 乗り一折し順風をけれ十七八里の海上と一日小走るとその夜象良津へ来りけ
 る歇店と定め麻酔見ざる網引漁獲る浦の光景と珍らしく與あれ一日二日と過ま
 程小肚裏に思ふ我身這地由縁も坐して食へ箱も空と世の常言もあるもの

盤纏を運にがまをて使て減らぬ金銭ありやと虚々として旅宿して明暮は愚魯
 安房の團主里見氏の賢を愛し士を招くと人の噂はつらと那里も亦由縁なり我
 身といへ近江の山賊の獨子を只是刑餘の貧下草之此の力量武藝あれば一番も
 戰場に待て物不遇ひのわづらひ何を得意ありと那里仕を求めは是も亦要る所
 乃之所詮本州の貧民の錢を貸し利を廉くして恩を施し交を結ぶ做さありやせん
 そも亦紹介の友ありて頼く人小談かから且身の落着く処を定め和助の友のい
 来もせん先や便宜の地方を擇む膝と容るふあつと主意既決りければ亦復上總
 十二郡の隈もろく編歷する程の年の及十月の初旬美濃郡館山の城下る普善
 寺と喚做を村に來りて此地の壽永元曆の年間鎌倉將軍朝の功臣なる上總介平
 廣常の館ありて此城の邊今も館山の名を送りて殿の臺と喚做する処あり又蘇利
 との村あり今も碑ひりてありて昔頼朝卿の梶原景時賜りし名馬磨墨の這蘇利より出るとい

然り廣常が幕下へまかせたる馬より梶原の會をありり又殿の臺より東へ宇佐
 八幡の神社あり上總介廣常が宇佐の宮を移せし又西のくま正八幡の神社あり
 廣常が説死の後鎌倉より建立せしる又南のくま諏訪の神社ありこの社頭を最
 大なる樟樹一株あり又同園長柄郡上御村あり諏訪の神社の側在る処の大樟樹と這那
 都て一對をその巨大十八圍ありと云根柢半石化し幹の中心腐朽せる處より
 宛洞窟の相似る内の中敷入を坐せし且その枝葉波瀾とて毫も日の光を洩さざる
 任せて地を距ると約一丈許ありて大枝六岐に分れるその間も穴ありて毎雨水を湛らし旱天の
 折も涸ぎともあらず上総人の上御村あり雄樹として普善村あり雄樹といふ惜む
 並目善村あり何の年間枯果て件の社頭松杉の年光を大なる合抱の木のあり
 抑件の並目善村の上並目善下普善の二村あり蘇利も亦普善村の屬村也當時の民屋
 一千餘戸ありの時館山の城主小鞠谷主馬助如満と喚做て美濃一郡の領主は這館

山と踊る城の當時上總ある処の二十六箇城の外されも數代の舊家よりける如満の父
 その小肖老常酒と嗜む色と好むが為小課役租税と重くと民の困苦とるるは其の邊
 妾の首飾と衣裳千金と費せども米地を神社佛閣の酷く頽破及び小言言訴て
 敢修復とてそののれい嗽訴入淫祠とてその訴るの罪を神甲寺料を奪ふと云ふ
 此の故に那普善村の邊なる八幡諏訪の神主も他郷へ走り跡断絶とて狐兔の棲まりある
 非道を神の出祟あるは是年の冬十月の肇より小鞠谷如満の米地の時疫會茶の流
 初とて病臥さるのるりのり都て疫癘の春夏の間にて流れ冬に至りて今病着の
 言く仍るべもあふと看官思ふあるべれも安房上總の西國の東海陸地の盡處なる且
 山と背中て海に向ひ圍まれ冬暖と春寒なる土人その春寒を倒寒と喚做し然
 ても何國も初冬の最暖なるも世十月と小春と唱ふ況上総の暖國十月小春温暖の
 折時疫とをまづい入りの理のまゝでかの如病疫の領主のみまろ招く所罪なり

民及びの風俗通の本本文あり城門火を失され禍池魚及びが如の誠とるるは其の間
 話除敏系小程の素藤の折夷瀆郡の來て普善村と過る程の冬の日の暮るるに
 夕て黃昏時時候あり久の歌店と永くと欲する村人都て病着あり但病病悩呻
 吟の聲戸々絶ざるも宿借まぐもあはれれ素藤殆困果てせん術のるは隨露路
 宿せんと思ふを殿の臺の頭へまゝ諏訪の神社あるとて只得く社頭へ杖を入る鶏
 栖の側小大樟樹あり稀なる老樹にけれ胆を洗しつ鶴立て親を約莫半晌許既わて
 暮春果けれ航て社壇あり登りて一夜と這里の曉さんと四壁酷く荒されとも必由
 緒ある大社とあがり本社拜殿の死でざる九庸ある人詰るを檐傾に鹿墜
 柱斜小篋子の朽ても有敷系雨露路と避るふ足れり既わして小夜深て森々たる
 茂林月を洩され寂莫なる廟宇露最寒なる睡られぬ隨のとき長く覺る及は夜
 丑三時候あらんぞ入忽地外面物ありて玉面嬢と々と喚ぶ聲を登時大樟樹の

下飲とぞく。来る者誰と問ふ外面の物答。我は是疫鬼。秋より後我當生旺の折。折れども今茲。殊に温暖。これ這頭と聊徘徊して。土民と云く病。今より安房へも欲を和。壤の近。比。比。も久。那。里。小。樓。これ。困。主。の。賢。不。肖。政。事。の。好。ま。大。緊。い。知。ま。る。る。ん。そ。の。受。と。向。て。進。退。を。定。め。ん。と。思。ふ。の。も。こ。い。へ。樹。下。の。物。答。て。我。も。亦。安房の。困。主。の。最。堪。く。死。死。の。死。の。送。恨。を。復。さ。ん。と。思。ふ。の。も。争。何。せん。那。困。主。里。見。父。子。の。知。男。兼。備。の。名。將。也。賢。と。愛。一。民。と。憐。ま。内。不。酒。色。の。驕。奢。る。る。外。は。苞。且。の。貪。林。若。君。正。く。去。て。臣。忠。る。我。の。故。使。り。を。和。老。那。里。赴。も。媚。毒。決。一。の。必。る。べ。く。且。這。地。の。民。每。病。臥。れ。も。一。人。も。死。し。る。の。も。是。の。時。ま。あ。る。故。病。の。勢。ひ。緩。く。む。を。外。面。の。物。答。あ。は。り。あ。る。今。より。旬。日。と。な。り。て。死。さ。る。者。半。過。ん。城。主。如。滿。の。非。道。る。神。の。怒。り。人。の。恨。も。是。禍。を。致。ま。し。へ。も。民。の。不。神。佛。と。深。信。の。者。甚。く。壁。言。の。神。社。の。如。祭。祭。首。美。の。礼。既。に。廢。れ。て。酷。く。頽。破。

及ぶ。尚神威。あ。る。似。ま。あ。と。我。の。注。連。と。越。か。り。那。病。勢。の。急。る。ぬ。も。只。是。の。故。と。い。ふ。樹。下。の。物。冷。笑。ひ。神。の。火。威。の。ま。れ。か。ま。れ。這。樹。の。虚。中。神。水。の。黄。金。と。漫。ま。り。一。晝。夜。お。し。這。水。を。病。人。の。飲。み。病。着。立。地。小。瘰。癧。果。ん。倘。の。理。と。知。る。名。醫。來。遇。り。折。和。老。誰。何。を。と。い。ふ。外。面。の。物。推。林。示。め。否。然。の。ま。の。む。も。あ。れ。縦。を。知。る。醫。師。あ。り。も。這。頭。の。民。領。主。の。與。小。年。々。讀。合。り。て。圓。金。一。枚。持。る。い。や。あ。の。折。當。處。を。去。る。ん。鳴。呼。る。の。と。敦。圍。に。分。是。の。後。怪。物。の。回。答。寂。と。音。絶。て。篋。子。の。下。の。鳴。く。蟋。蟀。の。聲。耳。の。幽。小。ゆ。え。け。り。素。素。勝。ハ。憶。ひ。も。怪。物。は。ち。相。譚。ひ。そ。の。夏。の。趣。と。現。と。も。空。果。て。且。驚。馬。且。怪。ま。る。肚。裏。小。思。ふ。今。宵。外。面。の。來。身。物。の。玉。面。嬢。と。喚。か。け。て。問。答。お。及。び。世。小。疫。鬼。る。ん。又。玉。面。嬢。と。喚。れ。い。則。是。木。精。也。那。樟。樹。の。精。火。の。あ。る。ん。少。く。か。如。き。這。地。の。民。の。今。時。る。及。病。疫。ハ。城。主。小。鞠。谷。如。滿。の。惡。政。非。道。の。所。以。と。い。へ。我。那。民。の。病。疫。を。救。す。恩。を。施。さ。ご。

必我を徳として。竟不羽翼とる事ある人望我小傾く時。那如満を推し。我
 館山の城主とあるんも。亦その折の運ぶるべ。小銭猶く捨むるべ。大和とらん
 や。噫。さるを咄ゆると。胸計較む秘密。鬼胆曉る。遅し。と。程約莫二响
 許し。鴉の茂林を離る。聲那。這不。吹えけり。登時。素藤。行裏。小收め。五百
 両の金。皆半。七。百。兩。毎の封皮。と折。小。小。小。包。と。推。大。樟。木。の。下。赴。左
 右。と。攀。登。る。少。少。枝。不。熟。れば。一。丈。許。上。中。分。れ。六。岐。の。枝。不。乗。る。と。先。の
 枝。の間。の。虚。の中。の。中。と。入。り。て。底。の。深。淺。を。試。る。水。の。冷。身。の。骨。不。徹。り。堪
 か。辛。く。去。て。指。さ。底。の。底。を。届。け。られ。心。安。し。と。小。小。居。居。の。金。送
 も。く。木。の。虚。ろ。水。中。に。沈。す。枝。より。下。る。る。月。輒。と。准。備。も。敷。出。け。れば。又。那。這
 と。巡。る。這。本。社。の。後。の。老。大。の。栗。樹。の。折。々。の。聲。る。れば。落。る。栗。子
 朽。も。せ。ま。る。る。あ。ら。究。竟。と。拾。摺。り。て。燧。も。合。出。落。葉。と。裏。て。炙。り。て。これ。を。ち。喫

ふ小之。食の。飢。と。凌。ぐ。足。れ。り。徳。而。這。神。社。の。詣。る。村。見。も。欲。得。と。全。村。都。て
 病。臥。され。ば。詣。る。者。も。ろ。り。と。等。程。第。三。日。の。朝。辰。牌。時。候。病。體
 ひ。一。個。の。後。生。竹。枝。の。携。り。辛。う。と。詣。る。あり。る。人。拜。殿。の。朝。の。堂。を。鳴
 ら。額。と。り。て。黙。禱。約。半。响。許。身。を。起。し。て。去。り。と。せ。程。不。素。藤。や。と
 吸。禁。め。て。和。郎。の。什。麼。何。里。の。人。を。重。病。の。ま。に。行。步。難。易。の。為。体。と。我。外。を
 又。小。忍。び。我。の。仙。傳。の。良。菜。あり。人。の。病。疫。と。救。ん。與。諸。國。を。遊。歴。ま。る。と。久。し。病。着
 救。ふ。と。の。れ。て。件。の。後。生。の。訝。り。る。素。藤。と。は。ぐ。と。ち。目。成。て。そ。を。飲。み。て。は。い
 小。可。い。程。遠。く。上。並。善。村。の。莊。客。碓。谷。沙。八。が。孩。兒。を。褚。九。郎。と。喚。做。ま。の。今。茲
 時。る。病。疫。を。全。村。枕。と。拾。り。る。我家。の。上。二。親。あり。下。弟。あり。妹。あり。皆。大
 病。犯。され。て。鍼。灸。茶。餌。も。驗。る。露。命。旦。夕。の。通。り。たり。そ。中。小。可。い。病。痴。聊。圓。の
 且。辛。く。と。這。御。社。の。詣。て。親。胞。兄。弟。の。病。鬼。退。治。を。祈。る。の。は。抑。身。の。何。國。の。大。人

老然神某と傳受して作善と旨とありんと問返されて素藤の杖とあり領
 我の原是京家の浪人ト部某と喚做まの陰陽の術醫巫療の神方先祖相
 傳の秘録ありありとせ世の萬人の災厄を救ふ為の諸國を遊歴して這地來つて
 日這館山の城下で歌店と求んと發し戸毎皆時疫の病臥しとて美引
 のあり已とせぬぞ這神社通夜とて夜と曉と程憶つて神の示現と夢の
 社頭なる大樟樹の虚神水ありと知りその神水は黄金と浸して一晝夜し
 汲きてを病人の飲ませれば病疫立地癒ると管帯の杖と拂ふる易く我幸ひ
 那這受て受て謝物多くありその金と成那木の虚投入水に沈み却村人の來る
 等らと既のまを三日及ぶ和郎の身の病はあれ那大枝の登りかこらん先我水と汲て
 させんその身の這里で試喫むべし餘の家ありて還りて親胞兄弟薦めぬ死代起
 きて生かす一壽と増し老に至るとそ和郎一家のまをば全村の病疫を驅除ん

疑念をいひてくも用意とありけん神酒場の口缺ると社壇の下より合出ると
 携て樟樹の大枝小攀登りて堀と虚を推入る水と十分盈り又底深くを
 入れて圓金一枚合出徐に樹下下り立て然而褚九郎示さる這金那神水浸措
 たる徴を水と俱し和郎が合出食者這里來て水のゆえ金も合出し去れ人別
 一枚の外を許さばの爰と隈る修と町寧の教諭とて件の水と飲しけり現熱病の劇に
 の執邪腸胃と焦折黄金一味と水の前火と冷しめて飲さればその熱と治去る
 あり然素藤が鬼語とて儀の如く不處自然と其方稱ひし褚九郎の件の水は
 受戴りて飲する時と程を快然と心地清なりと雀躍する不勝の飲し素藤と
 神と拜と感涙坐す杖む覺直と頭と拾け小可們幸ひ慈悲廣大なる大人を救れ
 茶水即效あるのまを海を塩焼く幸世圓金一枚惜氣もく貸のせる徳義大仁
 現身る誰のあはれ年々小鞠谷殿責合はれて全村困窮せしるも新流行病

之飢渴及ぶの多かり小可們も朝夕の煙絶えとせ折るれは辞を御恩を受まらん噫
 飲も慙愧し手退りて黄金水と親胞兄弟も戴せ然しとも餘り四鄰の人分與る
 その毎と俱復すをまゐるると飲び演進勇立てかま杖と忘れけん只堀をの推一家
 路と投ていそげは徳又一晌許経る程那黄金水と受飲てその病ひ瘥る小樽柄杓を
 準備一携えいそ飲ぶ者いそ推る杖頭小堀竹の筒るんと拭て積九郎と先
 立。諏訪の神社へ皆聚来て素藤よりと告飲び演進を稱へ黄金水と汲んと
 いけり當下素藤の衆人ふら對ひ病着既瘥る者樹に登り神水と汲食て全
 村分配せし中中食て飢渴及ぶ者わ我豫樹の虚お措く圓金一枚
 貸せ死を或食て多く食んと欲し或貯禄ある者俱食せ窮のかりし一枚
 とも私せ神水の效るたのよ小堀神訓立地その身及んおの毛と怕れ慎むとよ大
 家跪して仰らばなりぬのそく飲ぶ不美せん快水と賜りぬと連りて已るり

介程の病着瘥る者幾名飲準備の素階子と縹平の樟の大枝投拭て
 縹水と汲食て衆人小堀とまぞ老幼男女受飲て飲め立地病着瘥り
 或の病勢劇くて起るるにぬるぬるの家の家族隣人が準備の小樽筒堀へ汲
 入水と遣して飲者とい病悩退り一霎時の程小堀可及べり口の飲ひあると
 去食し者あを乞ふ儘して圓金一枚と貸れぬ漸々小堀と倍増して陸續と聚
 る者而三日晝夜とつとそその汲食るるにさるるも虚る水の竭るれは折夷瀟
 一部の民皆生るるに食し者朝夕の新水の價も添られざる食病も亦艱
 あり。這再生の大恩徳と報るるにさるるも全村速に商議して轎子と素藤成
 村長の宿所へ請容れて日毎の御食饌大なる願ふ杖と地の住めて徳と一郡
 施しぬとて全村請て已るれ素藤の計策成ると思ふ故意溢りて屢請と
 兼引たり是より村人們又商議して那諏訪の神社を目今祠官絶果す大人を那

里の神主も神慮も稱ふべしと素藤も告げ、錢を集めて件の社地を家造
 作り、其果素藤に請程して命を聞き、皆謹んで歸依のめり、是より素
 藤の母黨の氏を冒して墓田權頭素藤と名告り、心もあや神も仕へ、加持祈
 禱と宗とてその法術と知れども、信まの心にて極めて效驗あられ、神
 稱へ尊敬して敢て誨ふべし、あつて素藤の奴婢と八名と仕へ、金を萬
 両、其宅も不自由、既五六百金、村人們も貸し、多敷百金の貯積、利
 益も拘り、又貸けり、是も趣早晩、館山の城内も、小鞠谷の
 家臣も、素藤も加持を請ふ、難病速癒、疾もあり、或その金と借りて、貧病立地、
 安んず、素藤も賃殖の人、士農工商尊信、東西と餽るも、借財も
 期違へ返さるる、一稔許の程、村一二の富家と、意も、
 藤の山賊、但鳥業、因が子、料も鬼語と、听て、百兩の金と惜ま、樹の鹿、水

浸と夷瀋一郡の人の病疫の死、起し、生、陰徳、陽報、其頭の土民、
 尊信せ、徳は福を、その胸計較あり、真実陰徳、人々活
 功、善報、と、況、真実慈善、と、施と好む、勉て人々の救厄と
 放生と、徳と積む、善報子孫及人、亦何の疑ひ、人々惜む、
 素藤も、足る、と、知、分守り、枝、他、親の積悪、債、
 奸計、圖、當、止、る、処、を、知、後、竟、身、を、殺、天、誅、を、免、れ、
 世人、一善、と、必、一善の果報あり、又一悪、と、必、一悪の果報あり、
 善悪の心、報の宛、環の輪、小人の僥幸、氷の山、雪の佛、久、
 の、間話、休、題、介、程、館山の城主、小鞠谷主、馬助、如、満、
 悠々、と、傳、て、天、一、個、の、老、黨、免、巷、幸、弥、太、遠、親、と、喚、
 喚、を、敦、圍、猛、く、吩、咐、る、若、們、の、知、近、地、
 我、采、地、の、墓、田、權、頭

素藤と僭稱ある。一個の檻杵見あり。愚民を惑して怪談妖語のさるさる神を藉
 して鬼を托して邪術をばつと穿えり。加旃恣の諏訪の神社の祝ひをりて社地を占て那果
 居宅も不義の富を誇りて我を刺ると告るのあり。今速に搦捕て民の惑を醒まし
 後漢の米賊張角の妖術をひびくをあん汝那里うち向て搦捕て幸のて末よ立地不梟
 首をて那妖言の根を鋤く。愚民們尚悲を請て妨るるもあふ。開も悉に搦捕ぬ。一
 人も漏るべからず。夥兵を居居俱しての尙も餘るもあふ。斬棄すともけり。あはれ快
 快せよ。性急なる君命推辭の由も遠親の遠く言葉も退て先隊兵を聚合
 けり。素藤の件の遠親も御向の愛子の難症を命危る。折素藤の祈禱を請て死
 するともゆるり。只顧他を尊信もて文の遂に後又素藤を金五十兩借
 るともゆるり。他借の急債を贖ひてある恩誼の得意人を緝捕使に命せられ。心
 竊に困果て。思ふも諫て听るべもあはれ。情々地不村長を告知し。素

藤と走りす。小あくあ。尋思とて一封の密書と寫の密使をて。普善の村長
 許遣し。れ村長のああるを。驚憂ひ。信々と村人の傳示。皆共侶の素藤の宿
 所を集合し。衆議を凝りて。送て塚を。素藤の言を謀る。氣色を
 憚る。村人們を推鎮めて。各々然の。氣の。緝捕の頭人。遠親の我と。断金の交。あり。他が
 寄來の折を。進退を定む。姑且酒家。うち任ね。の。大家争ひ。難で。心の。思
 の。黙止。と時。程。小程。免巷。幸。弥。大。遠親。の。村長。の。通。考。れ。速。素藤
 落し。遣ら。今。の。時。候。多。一。と。思。心。と。色。の。生。野。兵。四。五。十。名。と。從。て。諏。訪。の。社。頭
 赴。先。素藤。の。宿。所。の。四。方。と。轉。々。と。捕。卷。せ。一。家。の。内。人。居。居。皆。籠。り。こ。る。あ。あ
 ん。咳。の。聲。早。や。久。訝。と。夥。兵。を。禁。め。獨。背。門。の。找。入。り。と。素藤。み。ら。う。出。迎。て。客
 房。伴。ひ。け。る。事。の。為。体。村。長。と。首。と。て。究。竟。の。社。仗。百。名。許。坐。席。の。左。右。不。羅。列。れ。の
 遠。親。の。思。ふ。も。似。ぞ。是。れ。て。找。難。と。素藤。の。殷。勤。小。上。等。席。を。讓。り。と。聲。を。情。め。と

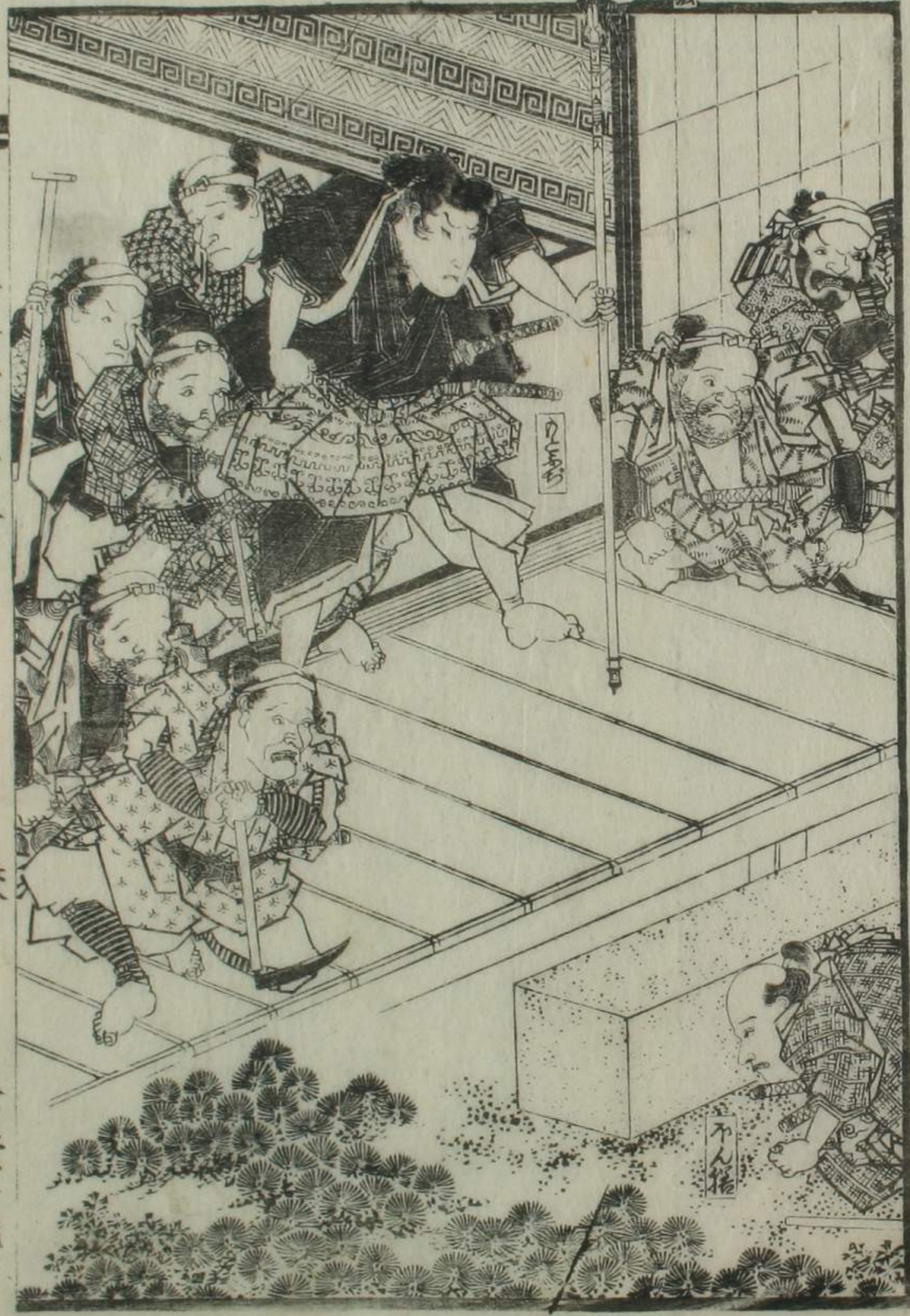
談まほせり在下さる罪をけれも。小鞠谷殿の憎れ。緝捕使とあふ。尊公情を地小告
 めりて他御へ遊よと誨ら。文遊の情を多く遊ぐ。されども身の惜む不足の憐む下
 這村人們が非道の領主を掠殺せられ。那悪政不堪され。俱他御走んと。民人都在離散
 せ。明日より誰の咄き安房の里見が攻殺され。必隣郡の城主も累られ。在下尊公を相
 まる極て一郡一城の主も多た福女の貴相あり。あの折をとり。筒様を。恠々小計り。在下
 一臂の力を勤めて。大事立地不成就。是民の帰く。処天の與る。取られ。反て外に受ると
 ある深念を決めぬか。と理めり。と哄誘せ。遠親忽地心動。沈吟。幸と半响許。やう
 なる頭を拾げて。先生の教諭。定無理あり。卑職の徳あり。と。幸ふと。和助と。は
 大事必成り。めや。世に遮莫。世に祇逆の罪人。と。争何せん。と。素藤推禁。昔唐山
 周の武王。年々。その君。暴悪の紂王。討滅して。民の塗炭を救ひ。聖人。と。稱り。と。ま
 三尺の童子も知り。誰の貴公。と。祇逆。と。い。と。決断。と。い。と。説れて。遠親再談。及

へ。畢竟その談。儘せり。素藤。父村人們。の。筆。策。と。示。暗。誦。と。定。る。小。大。家。都。々
 その。あ。ろ。と。假。素。藤。と。紐。結。と。そ。両。力。と。持。り。の。あ。り。又。素。藤。と。合。り。の。あ。り。の。餘。り
 都。て。素。藤。が。與。領。主。の。恩。赦。と。と。唱。て。鎌。腰。の。短。刀。と。懐。の。し。俱。小。城。内。小。赴
 け。の。徳。而。遠。親。へ。外。面。を。一。置。る。親。兵。們。と。知。り。て。素。藤。と。村。人。們。が。先。づ。ち。擲
 捕。り。ぬ。り。て。他。們。も。相。俱。と。是。等。の。下。と。ゆ。え。あ。げ。ん。大。家。路。次。の。心。を。屬。と。実。事。を。秘
 の。事。あり。館。山。の。城。か。り。來。る。程。と。名。黃。昏。の。り。け。り。介。程。小。鞠。谷。王。馬。助。如。滿。の
 鬼。巷。幸。弥。大。遠。親。が。素。藤。と。擲。捕。て。牽。り。て。あ。げ。ん。と。村。人。們。が。歎。び。て。恩。赦。と。乞。ふ。と。て
 後。の。跟。ひ。推。参。せ。と。の。不。支。の。趣。と。ち。り。て。怒。の。堪。ぬ。有。司。們。小。燭。と。兼。し。と。問。汪。所。の
 上。坐。ま。せ。て。先。素。藤。と。牽。居。さ。し。と。み。ぐ。く。罪。を。責。ん。と。ま。支。の。紛。れ。小。村。人。們。の。扇。の。内
 へ。細。入。り。登。時。鬼。巷。遠。親。の。支。の。趣。を。ゆ。え。あ。げ。ん。と。縁。頼。の。り。ち。登。り。て。ま。身。邊。遣。赴
 くと。如。滿。の。勞。ひ。て。その。支。と。听。ん。と。さ。る。外。を。遠。親。送。さ。し。腰。刀。と。接。く。も。ゆ。え。如。滿。の

首を托地と敷き落せば吐嗟と駭く有司の毎に幸弥太乱心ある教主君を執せり大
 逆無道其処を退せんと罵りて捕捕んと闘はる。當下遠親聲高き人々の悟せ
 や如満年来暴悪する苛政不堪老民皆叛けり。この故に我里見家の密意に従ひて天
 誅を祈りぬ濁と去り清に就く。俱に榮と子孫の傳へん備る不惑して執疑なき皆如
 満のまゝ。快面縛して降参せんと喚らる。左右當りて躬方と憑とふ戦ふ。徳り
 程の素藤の假不撰の郷縛の素とを各振解けて村人持しる刀を合々縁
 頼より走り登ると遣り下と。柱る夥兵を物とせむ。右と左へ斫伏せり。今この夏の勢
 ひ小村人も亦起り立て利鎌短刀と打振々々俱に戦ひを幫助へ。夥兵は有司の
 皆一辟に斫立てて書院のへ逃走ると遠親の趕捨て引返へ。衆の首級を素藤の
 せんと頭髪と梳と引提て身邊に近らる。素藤を奪りてと唾を吐いて後
 うる刃の牙を遠親の頭と敷きて脚空する。軀も挫と劬手りて漬る血の側を杉戸の

葛を深做せり。浩処に城内る。老黨若黨我名飲鬼巷遠親を撃捕し
 とく。雑兵多く驅集めり。短鎗を引提。鉄又るとと推乃々。比皆廣庭より稠
 入りと素藤謀を遠親の首級を刃火串に持て。縁頼は立迎へ既近
 城の士卒を差招けり。聲高同やう。當城の諸士これを下。鬼巷遠親謀叛よ
 ても。その君如満主を弑する。天誅一霎時も借せり。不佞料を諸士代りて
 既、遠親を撃捕し。あつと。當郡の民們我を推して。俱に城を守りんと欲
 せ。是天命の歸る。処勢は推辞とせむ。權且當城を預り。各々共古又を
 謀らん。の美と許容せし。あやと詞巧不解。示ま。その前後左右の究竟の村
 人百名許利鎌短刀と多く持。多勢を怕る。面鬼の侮りか。見え。ふ
 當城の士卒們的。星表。その親族の如満の奴不觸れて。討せし。れのものあり。然
 ても。壁妾の與。其費を厭。諸士の俸禄を優。せ。り。と。恨。く。思。ふ。

と木の目首級



八天傳七郎巻四

共八

文泉堂蔵

素藤の城と
館山の城と
奪ふ



又九郎

八天傳七郎巻四

文泉堂蔵

多。ちりりふが。藤小惑まごわされ。他を仁義の君子と稱て。尊信そんしんするも。妙たぎく。ぬ。素藤すとうが。立地たちぢの逆臣ぎやくしん免めん巷かやう遠親えんしんと。般はん捕とらむと。徳とくと。都みやこて。帰順きこんの思おもひあり。登時とうじ當あた城じやうの老黨らうたう與利本膳いうりほんぜん淡木碗たんぼくわん九郎くわうらうと。喚こゑ做しよまの支しの勢せいひを。阿あ容よう々々々々と。鉾こほりを倒たふす。刃やいばと。靴くつおし。跪ひざまひま。答こたへるや。如ごと満まん暴ぼう戾り年ねんと。累かさひつて。逆臣ぎやくしんの與よ小こ絨じやうせせ。れ。嗣し子し達たつも。あ。る。不ふ。論ろん。立地たちぢの逆臣ぎやくしん遠親えんしんと。誅つゐ。めて。當家たうけの與よ大だい功こうあり。願ねがふ。今いまより。主君しゆきんと。仰おほせ。大馬だいばの力ちからと。書か。け。て。見み。ゆ。ら。り。ゆ。と。馳は。り。降くだ。参まゐ。る。王慶おうけいの。小傳せうでんの。筆ふで。擬な。む。一。千。載せんざいを。唱とな。げ。り。抑おさ。め。一。卷。兩。回りゅうかいの。水滸すいこ傳でん。王慶おうけいの。小傳せうでんの。筆ふで。擬な。む。一。千。載せんざいを。唱とな。げ。り。抑おさ。め。一。卷。兩。回りゅうかいの。水滸すいこ傳でん。是。後。回このちの。襪はき。澆しやう。也。這。事このこと。も。あ。る。あ。る。ま。ら。ず。畢。竟。素藤すとうの。奸計けんけいと。の。館山くわんざんの。城じやうと。横領よこねいと。する。後のちの。話わたりごと説いわ。甚。麼いかに。を。も。ら。次つぎの。卷まき。解と。合あ。ると。聽き。絲いと。か。

南總里見八大傳第九輯卷之四終

